

診断が困難な副咽頭間隙腫瘍

宇佐美 悠(1, 4)、鄭 新都(1)、今井 幸弘(1)、菊池 正弘(2)、上田 浩之(3)、
横崎 宏(4)

神戸市立医療センター中央市民病院 臨床病理科(1)、同耳鼻科(2)、同放射線科(3)、
神戸大学医学部病理学講座(4)

【症例】70歳代、男性

【現病歴】10年前に他疾患の検索にて副咽頭間隙腫瘍指摘されるも放置、最近になって頭部から頸部にかけての疼痛出現し、精査目的に当院耳鼻科を受診される。

【既往歴】30年前：高血圧、糖尿病、緑内障

20年前：心筋梗塞

10年前：脳梗塞

【経過】外来にて咽頭からの穿刺吸引細胞診施行したところ、胞体内に褐色色素顆粒を有する中型の異型細胞が緩やかな結合性を有し認められた。細胞診所見より悪性細胞で、malignant melanomaが否定出来ないため、入院後、外科的組織生検となった。

【組織】明瞭で粗いクロマチンを有する核に淡好酸性からやや淡明な胞体を有する紡錘形から多形の異型細胞が充実性に見られた(配布検体)。分裂像を散見し、壊死、周囲への浸潤傾向から悪性腫瘍と考え、免疫染色を施行したところ、CK部分的に陽性、EMA陰性、vimentin陽性、 α -SMA陽性、CD34陰性、desmin陰性、S100陰性、HMB45陰性、synaptophysin陰性であった。

【問題点】副咽頭間隙腫瘍に関して若干の考察を加え、報告する。診断ないし、鑑別すべき腫瘍に関して皆様にご意見を頂きたい。